

絵具の透明・不透明について

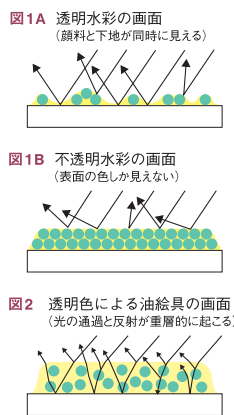
原理を理解する

「透明水彩絵具はじみやぼかしに適し、不透明水彩は下の色を覆い隠すので色面構成に適している」、「油絵具のバミリオンの上に透明色のクリムソレーキを重ねると、深みのある赤になる」etc. そういった表現上のテクニクについては、みなさんよくご存知だと思います。でも「なぜ、透明に見え、不透明色に見えるのか?」と聞かれると、返答に困る方が多いのではないのでしょうか。今回は水彩絵具と油絵具の透明・不透明の原理に迫ってみました。原理の理解は、表現する上で役立つでしょう。

水彩絵具の透明・不透明

水彩絵具には「透明水彩絵具」と「不透明水彩絵具(ガッシュ)」があります。両者を同じように水で溶いて、画用紙の上に塗ってみます。水分が蒸発すると、前者は画用紙の色が透けて見え、後者は画用紙の色を覆い隠します。

図1(A、B)はその原理を示したものです。塊は顔料で、矢印は光の進路を示したものです。図からもわかるように、透明水彩絵具



具(A)と不透明水彩絵具(B)では顔料の密度が明らかに違います。水彩絵具の主成分は顔料とメディウム(糊材)ですが、メディウムの量は透明水彩絵具では多く、不透明水彩絵具では少な目に調整されています。つまり、顔料の相対的な濃度は不透明水彩絵具の方が高いため、前述したような差が現れるわけです。透明水彩絵具の「透明」は、顔料密度が低いため、紙の白さや下層の絵具の色が同時に「透けて」見えることに由来しています。

油絵具の透明・不透明

テンペラや不透明水彩絵具などの作品と比べて、油彩画は画面に透明感があるのが魅力です。図2は油絵具を塗った画面を表したものです。リンシードオイル(乾性油)やワニスなどを大量に用いて描かれた油絵は、顔料を糊材である乾性油の層が覆うかたちで固化します。物の透明度は光の作用によって決定されます。光がまっすぐ通過する物ほど透明に見え、内部で光の曲がる角度が大きい(屈折率が高い)ほど、透明度は下がります。光を通過させずに表面で反射させたり、吸収してしまうものも不透明になります。表面反射にもとづく不透明については、透明なガラスと表面に傷をつけたすりガラスを思い浮かべると理解できます。また、光の吸収にもとづく不透明については、入り込んだ光が戻ってこない(したがって奥が見えない)と考えると理屈が理解できます。

さて、図1Bと図2を比較してみましょう。図1Bの不透明水彩絵具は、びっしり詰まった顔料に光が全て跳ね返されるので、顔料の色しか見えません。それに対して、図2の油絵具の画面は、光の一部が顔料の隙間から下地まで届いて反射されます。乾性油は水と比べて屈折率が高いので、相対的に顔料の屈折率差が小さくなり、その分、先に言った光の直進性が増します。油彩画に、他の絵具を使ったのでは出せない透明感があるのはそのためです。

また、油絵具には「透明色」と「不透明色」があります。顔料によってそれぞれ屈折率が異なり、低いものは透明色と呼ばれ、高いものは不透明色と呼ばれています。油絵具の透明色、不透明色に関しては「色材の解剖学」③④「油絵具の透明色」に書いてあるので、それを参照ください。



透明水彩絵具

不透明水彩絵具

ホルベイン絵具に関する
ご質問・ご相談は…

ホルベイン絵具 技術サービスセンター TEL.072 (985) 1223
〒579-8063 東大阪市横小路町4-10-52
電話受付時間/9:00~16:00 月~金曜日(祝日を除く)



ホルベイン絵具